

令和 8年 5月 11日

(宛先) 教育指導課長

学校名 明生小学校

学校長名 松浦 洋幸

校内研究実施計画書

1 研究主題及び教科

研究主題	自ら学び、聴き合い深め合う子どもをめざして
教科・領域	全教科

2 主題設定の理由

本校では、2024年度より「自分の考えをもち、聴き合う子どもをめざして」という研究主題を設定し、相手を意識しながら聴き合い、伝え合う活動を大切にし、ともに学び合うことで、自らの力を高めていく子どもを育てる研究を進めてきた。成果として、相手を意識した聴き合う関係づくりをしていくことにより、自分がわからないことを安心して出し合える関係ができたことが挙げられる。しかし、2024年度の反省から、相手の意見を聴くだけになってしまい深めるまで至っておらず、自分の考えと相手の考えを比べ、類似点や相違点を考えたり、両者を統合したりして思考し、自分の考えを広めたり新しい視点を得たりする深め合う姿があまり見られなかった。

そのため、2025年度は聴き合いを大切にしつつ、子ども一人ひとりの主体性を意識した学びに取り組んでいけば、深め合いにつながるだろうと考え、研究を進めた。一人ひとりの子どもたちが自分の興味や関心にそって課題やめあてを決め、学習方法やまとめる方法を選択するなど自分のペースで学んでいった。そして、分からなくなったり、困ったりしたときに「友達の考えを聴いてみたい」や「〇〇さんはどのように考えたのだろう」と他者の考えを聴きたいという意欲となり、さまざまな意見と自分の考えを比べ、深め合いへと繋がっていくのではないかと考え取り組んだ。

取り組みの結果、友達の考えを聴きながら自分の考えをもつことができる子どもの姿が多くみられるようになった。また、友達の考えに対して反応をするなど、受けとめながら聴く姿勢が見

られ、聴くことに対する価値づけができた。市のアンケートでも、「友達と交流しながら自分で考え課題解決をしている」という項目に対し、91%の児童が肯定的な結果を示した。主体性を意識した学びに取り組むことによって、友達の考えを聞く必然性を感じ意欲をもって取り組むことができていたのだと考える。

しかし、深め合いにつながるような、相手の考えの意図や根拠をとらえながら聴く意識が低い子どもも多いため、引き続き今年度も主体性を意識し、聴き合い深め合う子どもを目指した取り組みを行っていく。

また、学力等の認知能力の向上には、非認知能力の向上が不可欠であることが分かってきている。非認知能力とは、学力とは異なり、意欲や協調性、忍耐力といった、数値で図ることのできない能力である。本校の子どもの課題として上記に挙げたものに加え、主体的に学ぼうとする力や、困難なことにも粘り強く取り組む力、自分の考えに自信をもつことが弱いことが挙げられる。そこで、主体性を意識した学びに取り組む、自分に合った課題やペースで学ぶことで、学びに向かう意欲や協調性、忍耐力などの非認知能力も合わせて育まれると考える。

3 研究内容及び方法（具体的な手立てまで詳しく書いてください）

4. 研究内容

（1）「自ら学ぶ」とは

学ぶことに興味・関心をもち、一人ひとりが課題をとらえ目標を設定し、見通しをもとに学習を進めていくことである。また、自力で思いや考えがもてなくても、友達の意見を見たり聴いたりすることで、自分の考えをもち、次の課題につなげることができると思う。

（2）「聴き合う」とは

他者が何を伝えたいのか聴きたい、他者の思いや考えから学びたいという相手を意識した「聴き合う関係」づくりに取り組む。そのためには「ここどうするの?」、「これ、分からないんだけど」と自分の分からないことを安心して出し合える関係が大切であり、学校生活すべてを通して仲間づくりを含めた授業づくりを研究する。

（3）「深め合う」とは

「深め合う」の授業とは、すべての子どもが学びに参加している授業であることが根本にある。その上で、自分の考えを確かなものにするため自分の考えと相手の考えを比べ、類似点や相違点を考えたり両者を統合したりして思考し、自分の考えを広めたり新しい視点を得たりしながら、もう一度個人の学びへと返ってくる学びであると思う。

5. 具体的な方策（☆・・・低学年 ★・・・中・高学年 を中心として取り組む）

（1）主体性を重視した学び

①子ども一人ひとりが「めあて」を設定する。(★)

「めあて」は、授業の展開前に設定し、児童が活動の見通しをもつために必要であると考え。子ども一人ひとりの理解度や特性、興味などに応じてめあてを設定させる。その際、自分に合った「めあて」を設定しやすいように、学習の到達度を評価するための評価基準（ルーブリック）を示すなどの工夫を行う。

②「ふりかえり」の充実

「ふりかえり」は、本時における子どもの自己評価となるものである。「めあて」に対して、活動の過程や方法、理解したこと、考えの変容、新たな疑問など、子ども自身が俯瞰して捉えられるようにする。また必要に応じて「ふりかえり」の視点を掲示する。

③学習方法の選択 (★)

自分が設定した「めあて」を達成するために、自分で学習方法を選択する。教科書や資料集、インターネット、書籍など、教師が指定したものの中から選び自分のペースで学習を進めていく。また、教師からの「ヒントカード」なども活用する。

④協働する相手の選択 (★)

学習を進めていく中で、自分の考えを確かなものにしていくためには対話が必要であると考え。考えが似ている人と対話することで、自分の考えを確認したり、その教科が得意な人との対話で、新たな発見をしたりと、自分で協働する相手を選択し、聴き合うことで深め合いにつながると考える。

(2) 聴き合う関係の構築

①聴くことの価値づけ・意味づけ

聴くことの価値は、多角的・多面的に考え、自分の学びを深くすることにつながると考える。一人で学習するのではなく、学校で学ぶことは、仲間の考えや思いを聴き合い一緒に学ぶことで、人とつながって課題を解決していく経験につながると考える。このように聴くことの価値づけ・意味づけを日々子どもたちに伝えていくことで、学び合う関係が築かれていくと考える。

②聴き名人・話し名人・声のものさし

学校全体で、相手を意識して聴くこと・話すことを大切にするために、「聴き名人」「話し名人」「声のものさし」を統一して教室に掲示し活用する。

(3) 対話的な学びを生み出す環境づくり (☆)

ペア学習・グループ学習を意図的に設定することで対話的な学びを生み出すことがで

きると考える。

【ペア・グループ学習のねらい】

- ・話し合いによって自分の考えを確かにし、深める。
- ・相手がどんな考えをもっているのか知り、思考を広げる。
- ・自分と相手の考えの類似点や相違点を聴き合い、思考を深める。
- ・考えを出し合い協働して課題を解決する。
- ・対話を通して思考を重ねることで、新たな考えを作り上げたり、より良いものに練りあげたりする。

(4) 教師の働きかけ

子ども同士がつながりあって学び合う授業には、教師の適切な場面での、適切な働きかけが必要である。授業を行う際には事前に、子どもが間違えそうなところや、つまづきを想定し、どのように子どもたちをつなげて、課題を解決していくのかを教師側が準備しておく。

【子どもと子どもをつなげる場面】

- ・同じ課題で困っている子同士をつなげ、一人で悩む孤独感を共通の課題に変えさせる。
- ・異なるやり方をしている子同士をつなげ、互いの考えの意図や根拠をとらえさせる。
- ・困っている子どもと、理解している子どもをつなげ、困っている子どもがその課題を理解する。理解している子どもは、困っている子どもに説明することで、自分の頭の中にある曖昧な部分を、相手に伝わる言葉に変換する過程で、自分自身の理解をより確かなものにする。など

(5) ICT 機器の活用（活動場面の意識的な位置づけ）

ICT 機器をどの場面で、どのように活用していくのかを検討し、目的を明確にして取り入れていく。また ICT を活用して、子どもの考えをつなげることで学びが深まるようにしていく。

学び合いと ICT の活用をつなげるために ①情報を 2 人以上で共有する②情報を同じ目的（統合・分類・比較・関連付けなど）に沿って操作する、などの要素を学習活動のなかに設定することが必要だと考える。

(6) 「授業力 UP 5 ver 2」を意識した授業づくり

授業づくりの基本として示している「授業力 UP 5」を大切に授業づくりをしていく。

(7) ノートづくり

○ノートの使い方

①ノートを書く時には下敷きを使う。

②1 マス目に縦線を引き、インデントにする。縦線の左側には、ページ数や問題番号

などを書く。

③書き始める位置に気を付ける。慣れるまでは、教師が書き始める位置を教えていく。

④「めあて」を青色、「まとめ」を赤色で囲む。

⑤問題と問題の間は一行空ける。

⑥直線は必ず定規で引く。

⑦間違えなどは、消さずに残しておく。

6. 学びを支える日常の取り組み

(1) モジュール学習

毎週火、水、金曜日には、朝の会の前に15分のモジュール学習を行う。モジュール学習の時間では、低学年は読書や教科の学習、中・高学年は国語の学習を行い、授業時数を確保するとともに、基礎学力の向上を図る。

(2) 読書活動の充実

- ・月に「低学年は6冊、中学年は4冊、高学年は2冊以上」図書館で本を借りることを目標にする。
- ・学期に1回、多読賞を設け、各学年10冊以上5位までを表彰する。
- ・図書巡回指導員と連携し、季節の飾りや楽しい本・学年の本紹介コーナーを作り、足を運びたくなるような図書館にする。また、ブックトークなどで並行読書にも取り組んでいく。
- ・図書・体育委員会を中心に学期に1回イベントを企画する。
- ・1・2・3年生を中心に、ボランティアさんからの読み聞かせを行う。

上記のような活動を行うことで、児童が読書に親しみ、読書を通して様々な知識を得られるような取り組みを行っていく。

(3) 学力パワーアップ週間・メディアコントロール週間

平田野中学校のテスト期間に合わせて、年間4回（学力パワーアップ週間3回、メディアコントロール週間1回）行う。主な目的としては、学習習慣や生活習慣について親子で見つめ直す機会を設けることで、家庭学習や規則正しい生活への意識を高めることである。

(4) 家庭学習の充実

宿題については、以下の表を基本線としながら、各学年の実態に応じて内容を吟味する。また、家庭学習のてびきを発行し、家庭と連携した取り組みを行う。同じ内容の宿題を複数回出すなど、児童が基礎学力を定着させるために工夫をする。

(5) 「明生ノート」(自主学習ノート)

3年生以上で、専用のノートを1冊用意して子どもの実態に応じて週に1回程度取り組む。

「家庭学習のてびき」をもとに、目的意識をもって取り組ませる。また、チェックシートを活用することで、計画的に取り組めるようにする。自主的に行うことで、自分に合った学習ができ、学習に対する意欲につなげる。また、効果的なノートを作っている児童を紹介し、取り組むことが難しい児童へのヒントにする。

4 年間研修計画

一 学 期	4月 9日 第1回全体研修会（研究の概要、指導案の書き方、家庭学習のてびき） 7月 1日 第2回全体研修会（2年生研究授業、事後検討会） 8月 3日 第3回全体研修会（全国学力学習状況調査による本校の課題分析）
二 学 期	12月 7日 第4回全体研修会（5年生研究授業、事後検討会）
三 学 期	3月上旬 第6回全体研修会（今年度のふりかえり、来年度に向けて）